
なんでも屋 [AllOK]

ジャン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なんでも屋「All Look」

【Nコード】

N7877C

【作者名】

ジャン

【あらすじ】

なんでも屋の青年がいろんな仕事をこなし様々な人と関わっていくそんなストーリーです。よければご覧下さい。

なんでも屋「A110K」

なんでも屋

それは依頼があればどんな事でもやるお店。

『庭の草むしりから家のお掃除までなんでもこなします!!仕事達成率100%!!なんでも屋「A110K」!!どうぞお気軽にご利用下さい!!』

それがこのお店「A110K」です。

A110K店内

お店にはBGMが流れ、カウンターがあり、中ではコーヒーを飲みながら天井眺めている青年がいる。

「……仕事……こねえかな……」

なんでも屋「A110K」ただ今開店中。

第一部 ナル

「赤字……かな……」

店内で家計簿らしきものを見ながら呟く青年がいた。名前はジュン歳は18。店内にいるのはジュン一人だけだった。

「金がねえ、客がこねえ、仕事もこねえ……」

カウンターに持たれながら天井を見て呟くジュン。

「俺の生活があああああ……!!!!」

ちなみに持ち金は3000円。本気で生活が出来ないほど追い込まれてるジュン。

カランカラン

客だ!!ちなみに二日振りだ!!

「いらつしゃい!!!!」

入ってきたのは40半ば程の男性だった。男性は一度店内を見渡しカウンターに座った。

「ご注文は?」

ちなみになんでも屋「A11OK」は喫茶店も兼ねているのでコー

ヒーを飲みに来る客も少くない。

「あの……マスターのジュンさんに依頼をしたいんですが……」

男性は控えめに尋ねてくるがジュンはそれに笑って答える。

「俺がこの店のマスターのジュンです」

依頼内容は遺伝子操作研究をしている研究所と組織の壊滅。

「受けて頂けますか？」

ジュンは何も答えない。

「あの……」

そんなジュンを見て困った顔をしている男性に

「わかりました、その依頼確かにお受け致します。料金は前払いで200万、依頼成功後さらに200万。これでお受けさせて頂きます。」

男性は何も言わずに頷いた。

「さて、どうしたもんかな…」

ジューンは依頼を受けた研究所の前にいる。服装はニット帽に黒のジヤケット、下はジーパンの何処にでも居そうな服装をしているが、両手にしている金属の手甲と、腰の後ろにバツを描くように吊している2本の長刀がとても異様だった。

「正面突破は面倒だな、か行って特にいい案はなしか……」

一度目をつぶって深呼吸したあと、不適な笑みを浮かべた。

「正面突破だな。」

おもむろに右手を銃のように構える

「さて、ミッションスタートだ!!」

右手が輝き、その先端から矢が放たれる。一本ではとまらず何十本と続き研究所の正面には沢山の光の矢が突き刺さっている。

そしてそれを感知したように様々なロボットが現れる。

「警備ロボット……にしちゃ物騒なモン付けてんな、おい」

人の形をしたロボット達は両手に拳銃を持ちジューンを標準にしている。

「侵入者、接近、目標、捕捉、発砲、許可、発砲、開始」

機会的な言葉を発して発砲してくるロボット

「発砲開始って、ちょいまでやああああ!!」

焦って物影に隠れようとするが

「物影がねえ!？」

回りにあるのは研究所のみ物影などありはしなかった。

だがロボット達はお構いなしに撃ってくる。

「ちいっ!!」

右の刀を右手で抜き、

斬!!

ロボット一体を高速で近づき、頭を貫く。そのまま右方向に振り抜き、刀の長さに物をいわせて二体を切り壊す。

「突っ込んだら面倒だよなやっぱ」

ジュンはそういうと、右手をさっきのように構え研究所の上に向けた。

「降り注げ」

一瞬にして放たれた光の矢は上空から落下し研究所に雨のように降り注ぐ。

後に残ったのは光の矢が至る所に突き刺さっている研究所だけだった。

た。

「ミッションコンプリート」

呟いてその場から立ち去ろうとした。

ガンっ！！

研究所の下からドアかなにかを叩いてる音が聞こえる。

ガンっ、ガンっ

音はなりやまず研究所の一部が膨れ上がっていく。

ガンっ！！！！

一際大きな音がなると研究所の一部が吹き飛んだ。

研究所の下から出てきたのは研究員らしき男が数名と

「子ども？」

まだ五歳くらいの女の子だった。

研究員らしき男は研究所を見回した後ジュンの方を睨んだ。

「貴様何者だ？」

「別にたいしたものじゃねえ。ただの喫茶店のマスターだ。」

当たり前のように答えたジュンを見て研究員はニヤニヤと笑った。

研究員はジュンの方を見たまま言った。

「殺せ、039」

今まで黙って立っていた女の子が腕をジュンへと向ける。そして

「なっ!？」

女の子の腕が光りその姿を銃へと変えた。

「殺せ」

研究員の言葉と共に女の子は弾丸を放った。

弾丸は音速を超えジュンの心臓を撃ち抜こうと迫るが金属音と共に弾かれる。

「銃弾を…弾いただと!？」

銃弾は右手の手甲で弾かれた。

「遺伝子操作か、それとも何か別のものか…、何にしてもあの子の意志で撃ってる訳じゃねえな。」

右手の手甲の調子確かめながら呟いた。

《じゃなきゃあの子が泣く訳がない》

女の子は確かに芽から涙を流し震えていた。
ジュンは右手の手甲を強く握った。

「助けてやるよ。嬢ちゃん」

研究員を睨みながら放った言葉はその場に居る研究員を威嚇するに
は十分な殺気を放っていた。

周りにあるのは、私を閉じ込めていた研究員の体と私が閉じ込めら
れていた研究所のなれの果てだった。

そして、目の前にいるのは助けてやると言った男の人。
その人の優しさ溢れる笑顔を見た時私は意識を失った。

なんでも屋A L L O K 店内

ジュン視点

あの後、倒れた女の子を連れて店に戻ってきたが女の子は一向に目を覚まさない。

「ん……………」

お、やっと眠り姫のお目覚めか。

「ここ…………どこ…?」

「俺の店だよ。俺のことはわかるか?」

小さく頷く女の子を見て今までのことを簡単に説明した。多分ぼーっとこつち見てたから聞いてねえな。

「で、これからどうするかなんだが、聞いてたか?」

首を横にフルフルとした。

なんかとてつもなく和んだ。

「パパと…………いる……………」

パパ? 誰が? 俺が?

「パパあああああつ!?!? 俺が!?!?」

女の子は俺をしつかり見て頷いた。

その後しばらく女の子との話し合いが開始された。

「わかった。ここにいるのは問題ない。せめてパパは止めて兄にしてくんねえか？」

「やだ…パパ」

「人を指差すのはやめなさい。それとパパじゃない。」

「やだ…パパ」

こんなやりとりが30分続いた。

結局この子はここに住むことになり俺は晴れてパパとなった。

この女の子ナルとのお店経営が始まった日だった。

学園

ナルが店にすむようになって数日が立ったある日の朝。

店内ではジュンがのんびりと自分で入れたコーヒーを飲んでまったりしている。ちなみに午前6時。しばらくすると店の奥から可愛い女の子が出てきた。

「おはよう、パパ…」

「おう、起きたかナル。」

女の子ナルはジュンの元へとトテトと近づく。そして椅子に座っているジュンの膝へと座った。

「パパ、朝ごはんは？」

「今作ってやるよ。なにがいい？」

「んゝ、パパがいい」

「お前は俺を食い物だとおもってたのか？却下だどあほ」

呆れた顔でいいながらもジュンは少し笑っていた。

「へへへ」

そんなジュンを見てナルは嬉しそうに笑った。

ここ数日で馴染んだジュンとナルは毎日たわいもない会話をしながら

ら笑いあっていた。

午後10時店を開店してから数分立つと一人の老婆とスーツの男が二人入ってきた。

「いらつしゃい」

笑顔でお客に言うナル。老婆は驚いた顔でナルを見たがすぐに笑顔になった。

カウンターに座った老婆を守るようにスーツの男は老婆の左右に立った

「あんたがこの店のマスターかい？」

「ええ、俺がこの店のマスターです。で、ご注文は？」

「依頼だよ。それとブレンドコーヒー、一つ」

「ブレンド一つね。それで依頼の内容は？」

コーヒーを淹れながらジュンは聞いたが老婆から返事は来なかった。

「はい、ブレンド一つ」

老婆はコーヒーを一口飲むとしばらく黙りこんだ。

「いいコーヒーだね」

「そりゃどうも、でそろそろ依頼の内容を聞きたいんだけど？」

「なに、たいした事じゃないよ。あんたに私がやっている魔法学校に入学してほしいんだ」

「潜入か？」

「いや、ホントにただの生徒として入学してもらいたいのだ。」

「ホンキかよ……依頼としてなら受けるがなんのために俺を入学させたいんだ？」

「なに、近頃物騒だからね。生徒の護衛を兼ねてお願いしたいのさ。料金は弾むよ。」

老婆の顔を見るが裏があるようには見えない。

「わかった。受けるよその依頼」

「そうかい。それとしつかり三年通って卒業するんだよ。あとその可愛らしいお嬢ちゃんも一緒に入学させてあげるよ。二人とも勿論お金は全て免除してあげるかわりに寮の管理人をしてもらうからね。住所はこの紙に書いてあるよ。じゃあたしはこれで。入学式は二週間後だよ。遅刻しないようにね。ああ寮にはちゃんとあんたの部屋もあるからね。はやめにいくんだよ。」

言うだけ言ってさつと帰った老婆を啞然と見つめるジュンと話がよくわかっていないナルだけが店内に残された。

二週間後

ジュンとナルが今いるのは学校の体育館。今まさに入学式の最中で
新人生であふれかえっている、年齢は様々でナルと同じ年くらいの子
から、ジュンと同じ年くらいの子まで、体育館であふれかえって
いる。

「……つまらん……」

「…パパ……」

「どうした？」

「おやすみなさい……」

当たり前のようにジュンの膝を枕にして寝るナルと

「おいおい……」

苦笑いをしながら周りの視線に耐えて、目の前で話しているお偉い
さんの睨みに耐えるジュンだった。

入学式が終わっても起きないナルを背負ってクラスに向かったジュンはクラスに入り学校生活第一歩を踏み出した。

「久しぶりですね、ジュン」

踏み出した瞬間殺気を纏った水色の髪をした美少女に剣を突きつけられる

「うおっ!？」

首筋にピタリと止まっている剣を見ながら冷や汗を流し水色の美少女をみる

「ひ、久しぶりだな、ヒスイ…」

ヒスイと呼ばれた美少女は誰をも魅了する笑顔で

「死ね」

「ぎゃああああ!！」

ご臨終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7877c/>

なんでも屋 [AIIOK]

2011年1月14日03時39分発行